

インドスタディツアー-2018 夏レポート

Study tour in India



- 1) はじめに / フリー・ザ・チルドレン・ジャパンとは
- 2) 旅のスケジュールとルート
- 3) 参加者紹介、参加したきっかけ
- 4) デリー・アグラー観光
- 5) 教育・学校について
- 6) 都会と田舎の違い
- 7) 子どもたちと交流
- 8) お家訪問
- 9) 現地の子どもと交流
- 10) ボランティア体験!
- 11) ツアーに参加して





インド

スタディツアー- 2018 年 夏



はじめに



インドは経済発展が目覚ましい国として、世界から注目を集めていますが、過酷な環境で働く子ども「児童労働者」がアジアで一番多くいると言われていいます。インドの子どもが貧困や搾取から解放され、子どもの権利が守られるよう、フリーザ・チルドレン・ジャパン (FTCJ) では 2000 年から西ベンガル州で活動をスタートさせ、その後ラジャスタン州でも支援活動を行っています。

今回のインド・スタディツアーでは、支援先の一つであるラジャスタン州の貧困農村地域を訪問し、支援先の人々の暮らしや文化を学び、交流を通して、実際に求められているボランティアワークを行ったり、私たちにできることを考えました。

今回のツアーは、2018 年 8 月 8 日～8 月 15 日の日程で実施され、中学生 2 人、高校生 5 人、大学生 1 人、社会人 3 人の合計 11 人が参加者として集まりました。

東京、神奈川、千葉、愛知、和歌山、茨城、愛知、の地域からの参加となり、年齢も住んでいる地域も違う者同士でインドで様々なことを学び、考え、共有できるその空間に参加できたことは、大変有意義で深い学びがありました。

また、カナダやイギリスの若者たちも夏休みを利用して WE(フリーザ・チルドレン)のツアーでインドにやってきました。世界の若者と支援先の地域で出会い、国を越えてインドや世界の問題をともに考える機会に立ち会えたことは感動的でした。

この報告書には、11 名の皆さんが学んだこと、感じたこと、日本人たちに伝えたいメッセージが込められています。この報告書を読んで少しでもインドの魅力や課題について興味を持てただけなら嬉しいです。

フリーザ・チルドレン・ジャパン
代表 中島早苗

フリーザ・チルドレン・ジャパンとは？



■認定 NPO 法人フリーザ・チルドレン・ジャパンとは

フリーザ・チルドレン・ジャパンは、1995 年に当時 12 歳のカナダのクレイグ少年によって貧困や搾取から子どもを解放することを目的に設立された「Free The Children」を母体に 1999 年から日本で活動を始めた NPO です。開発途上国での国際協力活動と並行して、日本の子どもや若者が国内外の問題に取り組み、変化を起こす活動家になるようエンパワーしています。

●使命

フリーザ・チルドレン・ジャパンは 2 つの「Free」の実現を目指します。

- ・国内外の貧困や差別から子どもを Free (解放) すること。
- ・「子どもには世界を変えられない」という考えから子どもを Free (解放) すること。

●活動・事業

2 つのミッションの実現に向けて、以下の事業を展開しています。

[FreeTheChildren Project]

- ▶ 海外事業：5 つの柱でプログラムを展開し、子どもが教育を受け、家族が自立できるよう協力しています。
- ▶ 国内事業：子ども支援では貧困や虐待など困難な状況におかれた子どものエンパワーメント活動に取り組んでおり、緊急・復興支援では大規模災害で被災した子供、地域に対して緊急・復興協力活動に取り組んでいます。

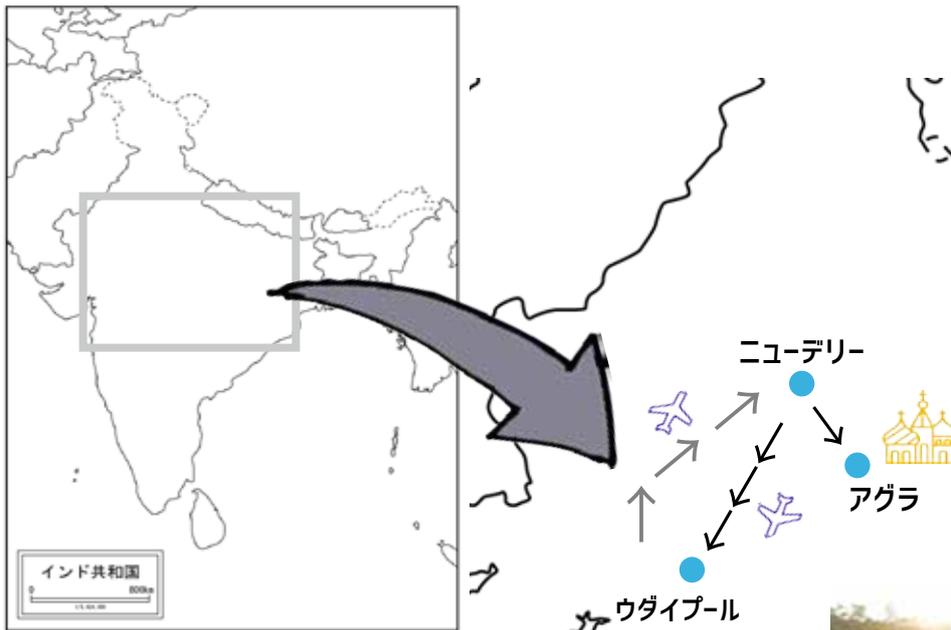
[We Movement]

- ▶ WE school：社会問題の「自分ゴト化」に向けた様々な形の教育プログラムの開発・実施
- ▶ WE Trips：フィリピン・インド・ケニアへのスタディツアーを実施
- ▶ Take Action Camp：「今を担うリーダー」として知識とスキルを磨くワークキャンプを日本とカナダで実施

スケジュール



	日程	スケジュール
1	8/8(水)	成田空港集合→インド・テリ-空港着→ホテルへ
2	8/9(木)	アグラへ車にて移動、世界遺産 タ-ジマハルを観光、観光後、テリ- のホテルへ移動
3	8/10(金)	テリ-→ウダイプル着 車で宿泊施設へ移動、 支援プロジェクトについてのオリエンテーション、アクティビティ
4	8/11(土)	ヨガレッスン、コミュニティでの開会式と 交流、インドの歴史や文化・人々の生活 について学ぶ、アクティビティ
5	8/12(日)	ヨガレッスン、学校建設やガーデニング 修繕ボランティア、アクティビティ
6	8/13(月)	ヨガレッスン、コミュニティにて交流、ボランティア、インド文化を学ぶ、アクティビティ
7	8/14(火)	ウダイプルの街を観光、空港へ移動 15:05 ウダイプル発 16:30 テリ-着 21:15 テリ-空港出発
8	8/15(水)	帰国(成田着)



タ-ジマハルにて集合写真!



インドの伝統衣装で文化体験!



朝はヨガレッスンで身体もスッキリ

参加者紹介

— 参加したきっかけ —



百瀬 真優
(高校1年生)

私は、学校で海外の深刻な貧困問題について知ったり、海外への物資支援をするなかで、発展途上国の貧困、教育、とくに女子の教育に興味がわきました。そこで、実際に現地に行って自分の目で現状を見て、何か自分が将来できることはないか見てみたいと思っていました。その時スタディーツアーを知り、現地の子供たちと交流できるような観光だけでは体験できないような活動がとて魅力的でこのツアーに参加しました。



武弓 穂香
(高校1年生)

私がこのツアーに参加しようと思ったきっかけは、説明会で実際に参加した方の話を聞いたことです。私はもともと海外に興味がありましたが、1人で行く勇気がありませんでした。しかし、このツアーではスタッフの方が必ずついてくださると聞いたので、チャレンジしてみようと思いました。また、子供が好きなので、現地の村の子供たちと触れ合ってみたり、インドの人の生活がどんなものかと興味があったので参加を決めました。



上國 寧々
(大学2年生)

大学の研究でアジア地域やイスラーム圏の歴史について触れたいと考えています。研究を進める前にインドの現状を知ることも重要だと思い立ち、今回のツアーに参加しました。歴史学は過去の記録をもとに構築される学問ですが、現代社会の諸問題にも歴史的背景が大きく関わっています。そうした意識を胸に、今回のツアーで知った多くの事柄を自身の研究につなげていこうと思っています。



梶田 桃加
(高校3年生)

私は学校の部活動で、世界や日本の貧困 児童労働 少年兵 ストリートチルドレンなどについて映画や本や講演などを見聞きしみんなで学んでいます。そこにてでくる子どもたちや村の様子や生活を実際に自分の目で見て体感し今後の自分に生かして行きたいと思い今回参加しました。また、高校3年生という今に子ども目線での現地の生活を見たいとも思い参加しました。



室岡 美咲
(中学3年生)

私は一度インドに観光で訪れたことがあり、その時、子供たちが、働かされている現状を知って衝撃を受けました。それから、大人になったら学校に行けない子供たちのためにボランティア活動をしてみたい、と思うようになりました。しかし、FTCJのサイトを見て、12歳の少年が団体を創設したことを知り、大人になったら、と思っていたけれど、子供にもできることがあるなら私は今行きたいと思い、参加を決めました。



伊藤 まどか
(社会人)

定年まであと数年となり、仕事以外に何かできることはないかと思うことが増え、以前から興味があった社会貢献活動に参加してみたと思うようになりました。そして、インターネットを調べる中で、NGOを支援する団体、国際協力NGOセンター(JANIC)のページでいろいろなボランティアスタディーツアーがあることを知り、特に、海外での子供に関するボランティア活動と文化に触れる体験ができる今回のプログラムに魅力を感じて参加することにしました。



森藤 啓太
(中学3年生)

父親からのサプライズプレゼントで、今回インドスタディーツアーに参加することになりました。人生初の海外体験となりました。机上で勉強することより、行動と実践することが好きな僕の性格をよく知る家族が夏休みの過ごし方の一つの案としてインドスタディーツアーの準備を進めてくれました。小学生のころから、ダイバーシティの考え方に基いたキャンプに多く参加していた経験を活かし、大きな一歩になると考え参加を決めました。スタディーツアーの詳細を聞いたのは、夏休みに入ってからですがフラットな気持ちで出発の朝を迎えることができました。



加藤 菜摘
(社会人)

豊かさとはなにか"を考えさせられた。穀物が不作の時は子供たちはいつもお腹をすかせていて、文房具が買えなくて学校に通えない子供もいる村は、私たちが最高の笑顔で迎え入れてくれた。日本にはなに不自由なく、ものが溢れていてすでに幸せにも関わらず、もっと便利になりたいという貪欲さこそ貧乏なんじゃないかと感じた。



前田 多恵
(社会人)

今回一緒に参加した友人がこのツアーの話を知りて自分も参加してみたいと思い、参加しました。



岡崎 桃々
(高校1年生)

私は、中学生生活を半分ほど過ごした頃から外国語学習をきっかけとして国際的な問題に興味を持つようになりました。そして、まだ時間のある高校1年生のうちに、できる限りそれら問題や諸外国の言語・文化について学んでおこうと考え、時間のある夏休みを利用して出来ることはないかとサーチした結果、このスタディーツアーに辿り着きました。



雨宮 二葉
(高校1年生)

中学1年生の時に父の勧めでJICAのイベントに参加したことがあり、それがきっかけで発展途上国といわれる国々の貧困や児童労働などについて興味を持つようになりました。中学2年生の時にFTCJのテイクアクションキャンプに初めて参加して自分と同じ興味を持つ人たちと話し合うことがとても楽しかったので、高校に入学してからは現地に行って、実際に自分の目で見たいと思うようになったのでインドスタディーツアーに参加することにしました。



Report デリー・アグラー 観光

上國 寧々さんの
レポートです！



ツアーの前半は、デリーやアグラといったインドの都市の観光を行いました。デリーの街は日本の都会とはかなり雰囲気が異なり、交通量の多さと牛や野良犬などの動物の存在にただただ圧倒され、先導するツアーのメンバーのあとをついていくだけでやっとという状況でした。市街ではほとんどバスに乗って移動していましたが、その車窓からも、目立つ色の制服を来て登校する学生たち、クジャク、サル、二人乗りのバイクで道を駆け抜ける人々、路上で雑貨を販売する人々など、日本では見かけない風景や人々の営みを自分自身の目で見て実感することとなりました。

デリーからバスで4時間ほど走った先にある都市がアグラです。アグラの街に降り立ってまもなく、今度は乗ってきたバスから観光客向けの車に乗り換え、そこからアグラのシンボルともいえるタージ・マハルへと移動しました。バスなどの一般の車両は、排気ガスがタージマハルの白い

外壁を汚してしまう恐れがあることから、入場に規制がかけられこのような措置がとられているのだといいます。また、観光客の持ちこめる荷物にも同様の理由によって規制が設けられており、現地の人々のこの建造物への保護意識の強さが窺い知れました。

タージマハルの敷地は広大で、門の内側には広大な前庭と互いに線対称に配置された巨大な建造物が鎮座していました。タージマハルは本来かつてのインドの皇帝であったシャー・ジャハーンが妃のムムターズマハルを思って設営した墓廟で、正面のメインの建物の内部には、真ん中に小さなムムターズマハルの墓石、その隣にはシャー・ジャハーンの大墓石が仲良く並べられています。ある逸話によると、シャー・ジャハーンはこの墓廟の完成後、毎日タージマハルを眺め亡き妻に思いを馳せていたということですが、この建物内の墓石の並びからもこの二人の特別な関係性を実感することができる良い観光プランでした。



インドでは学校に行けない子どもがたくさんいます。それは経済的理由からなるものや、政府の不十分な対策、親が教育の大切さを理解していないから起こるものです。今回私たちは村の中でも設備が良いと言われている学校を訪れました。そこでは決して綺麗とは言えない教室から、溢れる笑い声や笑顔子どもたちの輝く姿がありました。

教室では、実際に学校に通っている子ども達と交流し、日本の伝統文化である折り紙をこのために覚えたつたないヒンドゥー語と一緒に折ったり、手を繋いでダンスを

したり。カメラを向けると我先にと写りに来たりと、年相応でとってもかわいくって元気いっぱい子どもたちと交流することができました。

私たちの住んでいる日本では、学校に行くのは当たり前。国からも権利として保証されているため、毎日自分のために勉強して、友達と遊びお腹いっぱい給食を食べることが出来ます。しかしインドではその全てが困難です。私は教育がとても大切だと世界や日本の貧困、戦争などたくさんのことを学ぶ上で感じてきました。教育を受ければ、計算ができ文字の読み書きなど社会に出た時や今も役立つ事が学べ、いずれそれらは自分を守り



成長させるものとなります。また、教育の質もとても大事だと思います。教育はときに洗脳にもなりうるため、戦争を助長させたりと、子どもたちを苦しめるものにもなるからです。そんな大切な教育に対し大人はもっと重きを置き、学校建設や資金援助給食の提供 家庭を安定させ収入を得られるための支援など、様々なサポートが必要だと改めて感じました。また、そのサポートを私もしたい。私からその輪を広げていきたいと改めて思うことができました。



Report インドの教育や 学校について

梶田 桃加さんの
レポートです！



Report 文化について

加藤 菜摘さんの
レポートです！



物を運ぶときにより多くの物を持てるように頭の上にも乗せること、コンクリートが高価なので牛のフンを入れてかさましをして壁や階段を作ること、日本のような豊かさや便利さはなくても出来ることの中から探して生活する、生きる知恵が素晴らしいと思いました。

ある人の家にお宅訪問したときには、壺を頭の上に乗せて運んだりヤギへのエサやりをしたりしました。壺運びは本当にしんどくて、肩がもげそうになりました。

苦しそうな表情で壺を運ぶ私を見て、村の人たちはにこにこして、子供たちも集まってきました。子供たちは本当に親しみやすく、笑顔が輝いています。生まれた国、肌や目の色は関係なく笑顔で心が通じあっているように感じました。それが本当に美しいと思います。



一日目、二日目に訪れたデリーやアグラなどの都市部は、とにかく衝撃的でした。インドに行くのは実は初めてではないのですが、それでも衝撃的でした。街は行き交う車と人々であふれかえっていて、流石インド、という感じでした。特に、ラッシュ時になると、車がぶつかるスレスレの状態而走っていて少し怖かったです。日本車が走っているのもよく見られました。意外なのは、高層ビルが立ち並んでいて都会の真ん中であるはずなのに、豊かな自然がみられるということです。道路に横たわっている牛も見られましたが、ヒンドゥー教では牛を大切にする風習があるので、牛が横たわっていてもそっとしておくようです。また、スマホを持っている人が多いのもデリーの印象でした。

室岡 美咲さんの
レポートです！



Report
都会と田舎の
違い

三日日以降滞在したウダイプールの村は、都会とは違って静かで、人々も、都会のようにアグレッシブでグイグイ来る人々よりかは穏やかな人々が多いという印象を受けました。道路は、都会のように舗装されておらず、インフラ整備があまり行き届いていない感じでした。牛もよく見られましたが、都会よりも手入れされていて清潔感のある牛でした。また、スマホを持っているとコミュニティの子どもたちに珍しがられましたが、怖がられたりはしませんでした。スマホで写真を撮って見せるととても嬉しそうなお表情を見せてくれました。

また、農村部では、特に女性が、サリーなど伝統的な服を着ていたのに対し、都市部ではTシャツにジーンズ、といった現代的な服を着ている人々が多かったことです。他にも都市部の特徴として、デリーでは、ターバンを巻いている男性もいれば、スカーフを頭に巻いている女性もいることから、宗教の多様性がみられました。また、一つ、都市と農村との間での最も大きな違いを挙げるとすれば、それは、「コミュニティ」があるかどうか、ということだと思います。都市部では、着ているものから住居にまで、至る所に貧富の差、というものがみられましたが、農村部では、特にコミュニティ内での経済格差はあまりないように感じました。驚いたのは、コミュニティ内の人々がみんなで助け合いながら生きているということです。現代の私たちは、近所付き合いや地域の間人間関係が希薄になってきているような気がします。私は団地の方と道端で会うことも多いですが、会釈する程度で、あまり地域の方とコミュニケーションが取れていないな、と感じています。その点、私は彼らから見習わなくてはいけないな、と感じました。



僕たちは、FTCJが支援している小学校やウダイプールの村を訪問し現地の子どもたちと交流を行うことができました。現地の子どもたちが以前使っていた校舎とFTCJが支援し造った新しい校舎をみることができました。新しい校舎は、以前の校舎とは、歴然の差で壁が青く、光も多く入り、黒板・椅子・机があり学びの環境となっていました。

現地でヒンディー語を学び自己紹介を行い、校舎の中で音楽に合わせて、ボリウッドダンスを踊ったりする機会もありました。子どもたちは、非常に積極的に僕たちの肩に手をかけ一緒に踊ろうと輪の中に誘ってくれます。両手を広げ、大きく飛び跳ね、満面の笑みです。

村の子どもたちとの交流で印象深かったことは、みんな写真が大好きです。カメラを向けるとそれぞれの気に入りのポーズを披露してくれます。子どもたちの大きな瞳が印象的でした。村の子どもたちの多くは、靴を履いてません。躍動的で土のうえ石のうえを駆け回り楽しそうに遊んでいます。僕は「足は痛くないの?」と聞いてみました。「痛くないよ」との返事が返ってきます。3歳くらいの子どもの足の裏を触らせてもらいました。足が大きく、皮膚が非常に固かった感触がいまも残ってます。

僕たちは、日本に生まれ教育を受けてます。いままで、学校からの配布物プリントを貰い両親へ渡し、ペットボトルのキャップを集め学校へ持つていくことの意味もなんとなくしか理解していませんでした。途上国の暮らしを実体験し、社会貢献活動の意味と意義を理解することができました。児童労働を減らせるような活動に今後も参加し、たくさんの気づきをくれたインドの子どもたちを応援していきたいと思いました。

Report
子どもたちと
交流

森藤 啓太さんの
レポートです！



Report

インドのお家訪問

伊藤 まどかさんの
レポートです！



バリンド村の33才女性のお宅を訪問。旦那さんと、男の子2人のお母さん。部屋にはカーペットの上に直に座る生活で、家の中には調理用のかまどがあり、主食のチャパティを作っていました。チャパティは小麦等を水で練って、丸型に薄く伸ばして鉄板で焼くもので、私たち参加者も薄く伸ばす作業の体験をしましたが、慣れないと丸型にするのが難しいものです。以前は、部屋中にかまどの煙が蔓延する状態で、肺に疾患が出る等、健康にも影響が出ていたとのこと。今では、NGO支援により煙突が導入され、外に煙が排出されるように改良されたので健康問題も改善されたとのこと。安心しました。チャパティ作りをしながら、カーペットにハエが沢山いることに戸惑いを感じつつ、あまりにも質素な生活状況や15歳で違う村からお嫁に来たこと等、身の上話をお聞きしたと全てが衝撃的でした。彼女の一番の楽しみは近所のお友達と話をすること。

困っていることは、子供の教育のことで、小学校までは近くに学校があるけれど、上の学校に通うには1時間に数本しかないバス、それを逃すと歩いて学校に行かなければならない環境にあること。話を聞く中で、このお母さん世代の女性

たちの生活向上も支援が必要ではないか、結婚して子供を育てて、他の世界を知らずに、貧しさの中で一生を終えてしまうかもしれない生活を思うと、なんとかしてあげたいという感情が湧いてきました。親たちの生活向上を目指さないと教育を受けさせる環境にはなりにくいだろうと、解決するまでには時間がかかる根深い問題だと感じました。

村の方が毎日行っている水汲み体験も行いました。近くの貯水池から水瓶に水を入れて、頭の上に乗せて運ぶ作業ですが、とにかく頭に重いものに乗せる習慣もなければ、腕を上げる作業自体が辛い五十肩のため、水瓶をつかむ腕が痛くて大変な思いをしました。井戸も水道もない環境を体験し、蛇口をひねるだけで出てくる水の便利さが、本当にありがたいものだと感じます。最後に、家壁作りの作業を体験。牛の糞を繋ぎにして石の間に手で塗る作業は、かなり勇気が必要でした。私たちはさすがにビニール手袋をした上での作業でしたが、村の方は素手での作業に驚きです。

お宅訪問&生活体験の場は、改めて人の生き方を考える、良い体験になりました。便利なのが本当に幸せか、多少不便でも自然に囲まれてのびのび育つのが幸せか。無邪気な子供達の笑顔を見ると、何が幸せなのか少しわからなくなりますが、好きな道を自分で選択できる自由があることは、何より幸せなことと感じます。

この貴重な体験を通して、これからも支援を必要としている人々の笑顔が増えるよう、私もできることから、寄り添う気持ちを忘れず協力を続けていきたいと思っています。



前田 多恵さんの
レポートです！



村にはコンクリートや岩のようなもので建てられた家々があり、一見窮乏感が暗いように感じましたが、元気いっぱいの子供たちやその家族に温かく出迎えられ、一気に場が賑やかになりました。

訪問したお宅では、旦那さんと二人のお子さんがいるケサールさんにお話を伺いました。読み書きができなく、教育も受けてこなかったそう。今の生活では、食料が不作の時にはお腹いっぱい食べられていないことや、一日だいたい2食であること、重たい壺を乗せて運ぶ水汲みや、家畜の世話などの肉体労働を女性がやっているということでした。私たちとはかけ離れた生活、テレビのドキュメンタリーなどで見ていた世界が、現実存在している

ことを目の当たりにしてカルチャーショックを受けました。トイレもなくインフラも衛生面も完全とはいえない環境の中で生活している村人たち。もっと人々の生活向上に向けた支援が必要だと感じました。

一方で日ごろの楽しみは、近所の奥さんとお話することと笑顔で答えていた表情を見て、私たちと何ら変わらない、日常的な楽しみもあるのだなと少しほっこりしました。その村の伝統や生活の知恵など良い面も知れた反面、抱えている課題も多く、支援が必要です。

これからの未来を創っていく子供たちへの教育生活力向上、自立支援のため大人の女性への教育、食料、衛生面やインフラ整備など・・・小さなことでも、私たちができる支援は何なのか考え、行動していきたいと思っています。





武弓 穂香さんの
レポートです！



私たちはコミュニティの村のキッチンを作るために階段作りと床作りを行いました。レンガは一個一個運んでいき、セメントは手作りです。階段はレンガ、岩、石とセメントをパズルのように組み合わせて作りました。レンガとレンガの間隔のとり方やセメントの付け方はやっているのを見ると簡単そうでした。



たが実際にやってみると、とても難しかったです。床は穴にたくさんの土を入れる作業をしました。とにかく、力がある作業でとても根気のいると思いました。今回、全ての作業は手で行いました。日本ではショベルカーやフォークリフトなどの便利な重機を使って、効率よく作ることができます。だから、この活動を通して建物を手作業で作ることがどれだけ大変なのか分かりました。また、村の人や作り方を教えてくれた方や(師匠と呼んでいました)、ファシリテーターともコミュニケーションをとることができました。ヒンディー語を覚えてもらい、岩を「バタ」、石を「サタ」、セメントを「サマサ」と言うそうです。私たちが活動したことはほんの一部だと思いますが、インドの人たちの生活に少しでも役に立てたら嬉しいです。

岡崎 桃々さんの
レポートです！



訪れたコミュニティで学校の厨房建設のお手伝いのボランティアを行いました。ボランティアの内容は、学校の厨房の階段を作ること。厨房を作ること、より子供達にご飯を提供しやすい環境になることを聴き、いくつかのグループに分かれて建設作業を行いました。建設作業といっても、機械は使いません。ですから、ただ作業をするだけでも気づきや喜びがありました。



例えば、機械の代わりに手を動かして建設に使うセメントを作ったことは、機械がいかに私たちの生活を便利にしているか、

機械がないとどれほど大変なことか気づかせてくれました。さらに、建設作業に使う水をバケツに汲んで運んだ時は想像以上に重くて大変だと感じたのですが、ボランティアをした学校ではトイレへの水道が断線していたので流すために水をバケツに汲んでトイレまで運ばなくてはならないというのだから驚きでした。こういった気づき・学びの他にも、スタディツアー参加者のみんなで協力し、分担して作業を行ったことも良い経験になったと思います。

ツアーに参加して①

豊かさとはなにかを考えさせられた。穀物が不作の時は子供たちはいつもお腹をすかせていて、文房具が買えなくて学校に通えない子供もいる村は、私たちが最高の笑顔で迎え入れてくれた。日本にはなにに不自由なくものが溢れていてすでに幸せにも関わらず、もっと便利になりたいという貪欲さこそ貧しさなんじゃないかと感じた。(加藤 菜摘)

実際にこの目で貧困地域を見たことがなかったので、現地でボランティアをしたコミュニティなどでリアルな生活の様子を見たときは強い衝撃を受けました。そして同時に、実際に訪れてみないことにはわからないことが沢山あると感じ、今まで何も知らなかったのだと痛感しました。英語の通じない現地の子供達と交流する機会があり、言語がなくとも通じることはあると感じると共に、コミュニケーションの中で共通言語の存在がいかに大きいかを再確認できたと思います。知らなかった世界を見たことは、私の将来ありたいと思う姿に別な方向性を持たせてくれました。(岡崎 桃々)



今回のボランティア活動で1番印象に残ったのは、コミュニティの子たちが本当に楽しそうに学校に行っている、ということです。私は、勉強嫌いなあ、疲れたなあ、と思ってしまうことが多々ありますが、彼らの楽しそうな姿を見て、自分も見習わなければならないと思うと同時に、学校に行けるのは幸せなことだということを改めて自覚しました。

また、今までボランティア活動は、こちらが一方向的に施すものだと思っていましたが、8日間わたるツアーを通して、コミュニティの子供たちと「一緒に」活動することも一つのボランティアの形なのだと思いました。FTJの他の活動にも興味があるので、機会があれば是非、また参加したいです。(室岡 美咲)

雨宮二葉さんの
レポートです！



学校の厨房の建設に携わることは、今回のスタディーツアーで1番やりたかったことだったので、体験を心待ちにしていました。

しかし一筋縄では行かない作業でした。猛暑ではなかったけど決して涼しいと言える気候でもなく、その中体を動かす作業を続けることは大変でした。でも、やってよかったなど

強く思えました。なぜなら、何かを変えることができる体験は実際に行かないとできないことだからです。セメントを作るグループ、床の下を埋める土を入れるグループ、そしてレンガで階段を作るグループの3つに分かれて作業をしました。ファシリテーターの方や行ったメンバーで声を掛け合って作ることは大変でしたが楽しかったです。

作業をしている中で、言葉の壁を感じました。ヒンディー語しか喋れない現地の方、ヒンディー語と英語もしくは英語しか喋れないファシリテーターの方、そして英語と日本語しか喋れない自分。喋れる言語が全員違いました。その中で指示を理解することはできないのではないかと思います。

しかし、その壁を笑顔に変えられたのはそこにいた全員が1つの目標に向かってきたからだと思います。セメントはヒンディー語で「マサラ」と言います。それがわかって、みんながマサラを使うだけで心が通じた気がして、そしてそれが不思議と笑いを招きました。

初めて会って、言語も生きてきた文化も違うのに1つの言葉で笑顔になれたことが本当に楽しくて嬉しくて、感動しました。そうやってみんなで厨房を作った記憶はすごく鮮明に残っています。2回しかできなくて、私は少ししか手伝えませんでした。でも、少しでも自分の手で変えられたことはとても誇りに思うし、その少しは確実に大きな変化につながると思っています。そんな大きなことに携われる機会に出会えて、とても充実した体験ができたことにすごく感謝しています。



今回、このスタツアで発展途上国であるインドの子供たちと交流することで発展途上国は全く別の世界ではないということをとて強く感じました。今まで発展途上国支援のボランティア活動をしたことはありましたが、実際に現地に行ったことがなく本当にその支援で喜んでくれる人がいることを実感できませんでした。しかし、実際に支援を受けた学校に行ったとき元気な子供たちがたくさんいて、また、その子たちがフリーザチルドレンの支援を受けて学校に来れているということに感動しました。

今まで、自分が行ったこともないのに発展途上国に対して危険な国というふうに考えてしまっていたのだと気づかされました。確かに生活している環境は違いますがとてもエネルギッシュな方ばかりでした。

日本でボランティア活動などをしているだけだと本当に現地の子たちにつながっているのか不安になったりしますが今回のスタツアでこのようなことを実感したおかげでこれから積極的に国際支援にかかわっていきたいと思いました。とても実りある1週間でした。本当にありがとうございました。(百瀬 真優)

私は海外に行くのが初めてなので不安なことばかりでした。特に、インドはヒンディー語なので言葉が通じないことが心配でした。しかし、言葉が通じないからこそ、お互いがコミュニケーションをとろうとしジェスチャーなどを使って会話をすることが出来ました。

このツアーに参加して、当たり前が当たり前ではないことを感じ、今の生活の豊かさを知りました。日本では電気、トイレ、きれいな水があるなどといった便利な生活をしています。しかし、訪問したお家がかまどはありませんが、電気、トイレ、水道、お風呂がありませんでした。また、大抵の日本人は毎日3食しっかり食べることができますが、村では1日2食で満足する量を食べられないこともあります。今ある環境がどれだけありがたいことなのかが分かりました。

今回のツアーで水汲み体験や文化を学ぶなどのなかなか出来ない貴重な体験を沢山することが出来て良かったです。コミュニティの村のような地域は、世界に沢山あると思います。だから、そのような地域を少しでも助けられるようなことをやってみたいと思いました。(武弓 穂香)



普通の旅行では体験できない、インドの文化に触れたり、インドの村人や子供たちに密着できたのは貴重な体験でした。初めて知ることが多く勉強にもなりましたし、貧困や教育についても改めて考えさせられました。この旅で感じたことや得たものをこれっきりで終わらせるのではなく、これからのボランティア活動や自身の生活にも活かしていきたいと思います。(前田 多恵)

ツアーに参加して②

日本の暮らしとインドの暮らしや文化の違いに驚きの毎日。道路には牛が歩いており、ハエも多く、まだ不衛生なところもあることは正直な感想です。また、ニューデリーからタージマハルへのバスでの移動は、交通網の整備不十分なかクラクションの響く音も多く、尋常ではないバイクの交通量の多い光景を見てきました。しかし、僕が現地で感じた光景はインドに住む人々にとっては普通のことであり日常の生活であることに気付きました。正直、今の僕は語学力が乏しくマクドナルドやスタバでの注文では変な汗をかきながら商品を手にするのに苦労しました(笑)

この夏、僕は一步踏み出し、日本を飛び出したことで新たな価値観を手に入れることができましたと思います。語学・会話はもちろんできた方がいいと思います。それ以上に大切なことは「笑顔」「異なる文化を理解すること」だと非常に実感しました。他国との違いを気付き受け入れ、他社の視点に立ちコミュニケーションを図ることが大切であるということに気付かせてくれたのが一番の発見であり、大きな収穫となりました。

渡航中、常に「笑顔」を絶やさず僕たちや現地の方々との架け橋をつないでくれた早苗さん！頼もしい兄貴のような存在である雄一さん！現地の子どもたちと遊ぶときは無邪気少年のような人柄が素敵でした。スタッフすべての方々本当に感謝しております。(森藤 啓太)

通常の海外旅行では味わえない盛りだくさんのプログラムで、とても充実した楽しい体験ができました。また、スタッフの方々の温かで丁寧なサポートと、一緒に参加した楽しいツアー仲間本当に感謝しています。村の訪問、子供達との交流、学校作りの一環のボランティア活動、インドの文化に触れる体験、そしてインドという国の刺激的な環境が、いつまでも心深く残りそうです。

中でも、村のお家訪問は衝撃的でした。また、道路には車やバイクが溢れていて、バイクに家族が4人で乗っている姿に驚き、牛や犬が闊歩していて、特に大きな牛が平然と道路を塞いで歩いたり座っている姿は、牛が聖なる動物として大切にされている独特な環境の国であることを目の当たりにしてとても新鮮でした。

参加前には、年齢を気にして戸惑っていましたが、中島さんがおっしゃってくださった「どの年代でも楽しめると思いますよ」の言葉通り、思い切って参加して、本当に良かった思える旅になりました。ありがとうございました。また、スタディツアーがあれば是非、参加してみたいと思っています。(伊藤 まどか)



私自身初の海外という事もあり、飛行機に乗ることもドキドキだったのですが、デリー空港に着くとその独特の匂いと空気に圧倒され、とても高揚した事を覚えています。

ツアー中では、日本との違いを強く感じ、いかに日本はものにあふれているかを感じました。しかし発展途上国とされるインドでは笑顔が溢れていて、みんなイキイキと生活していたことから、物に溢れていることが豊かとは決して言えないと感じました。

世界遺産であるタージ・マハルを訪れた際には、すぐ近くに物乞いする子どもがいたり、手足がない人がいたりとすぐ格差を感じ、辛くなると同時に私があの子達の助けになる事をしたと強く思いました。高層ビルの隣にはテントで過ごす、屋台で生計を立てているであろう家族がいた事も印象的でした。そんな家族をみて、私たちはこの格差をどれだけ縮められるかが問われているなと思いました。最後に、めっちゃ楽しかったです、また行きたいです！！(梶田 桃加)



インドスタディツアーに参加して、現地に行ってみないとわからないことたくさんあるんだな、と感じました。学校の数や生活の様子、医療の技術という視点だけでは貧しい暮らしをしている人たちの生活のマイナスな面しか見ることができません。もちろん世界的に豊かな国である日本は、マイナスの面に着目して支援をすることが当たり前だと思います。でもだからってなんとなく「かわいそうな人たち」という印象を持っていた自分は勘違いをしていたな、と思います。

行く前に自分が持っていたマイナスな印象と目で見えたプラスな印象がなかなか一致せず少し複雑な気持ちにもなりましたが、村の人たちの笑顔はとて明るくて元気づけられたし、私達を暖かく迎えてくれたことにとて驚きました。

そして今まで以上に困っている人たちの助けになりたい、少しでもいいから何かできることをしたいと思いました。数値や言葉では表せないもの、実際に行かないと経験できないものを知ることができて本当に貴重な8日間でした。自分が見てきたものが決して普通にあってはならないものだということを忘れずに、これからもできることをやっていきたいです。(雨宮 二葉)



*Thank you for joining.
Keep on taking action together!
We can change the world.*



世界の変化は、きみの変化から。
できることからはじめよう！

You are a World Changer!

WE Share Cards

—書き損じはがきを集めて教育の機会を届けよう！—

余った年賀はがき、印刷ミスや書き間違えて送れないハガキや切手を集めれば、お金を集める募金と同じだけの力になる！世界の子も達が文字の読み書きができる世界のために、力を合わせよう！



WE Create Change

— 10 円玉募金で世界に変化を起こそう！—

2,500 円で、一生分のきれいな水を 1 人の人に、5,000 円で、生活に役立つ 1 頭のヤギを送ることができる！あなたの集め方は 1 人でコツコツ派？ みんなでワイワイ協力派？



WE Love Fair Festival

—文化祭でフェアトレード商品を販売しよう！—

フェアトレードやエシカルについて知ったら、次は学校で広めよう！文化祭は学校内だけでなく、多くの人に広められるチャンス。生産者の支援につながる商品を販売したり、展示を通じて社会問題や自分達のアクションを伝えよう！



WE Are Friends

—フィリピン・インドの子もたちと文通友達になろう！—

支援先の子も達とお手紙を通じてお話ししながら、生活をサポートできるプログラム。どんな暮らしをしているの？なにが好きなの？どんな夢をもっているの…？「支援する側」「支援される側」ではなく、お互いをもっと知って、「ともだち」になろう。



ご寄付・募金先について

※指定事業への寄付の場合はお知らせください。

世界中の貧困から子どもを解放することができるように、そして日本の子もたちの力を育てることができるように、当団体へのご寄付のご協力をお願いいたします。

◆銀行振込

三菱 UFJ 銀行 上野支店

普通 5360502

特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

(トクヒ) フリーザチルドレン

◆郵便振替

郵便口座：00120-5-161532

口座名称：フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

◆クレジットカード

VISA・MasterCard のカードがご利用いただけます。

※手続きは WEB サイトからお願いいたします。



「世界は変えられる」子どもがそう信じられる社会に

認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン インスタディーツアー 2018 夏報告書

●発行：2018 年 9 月